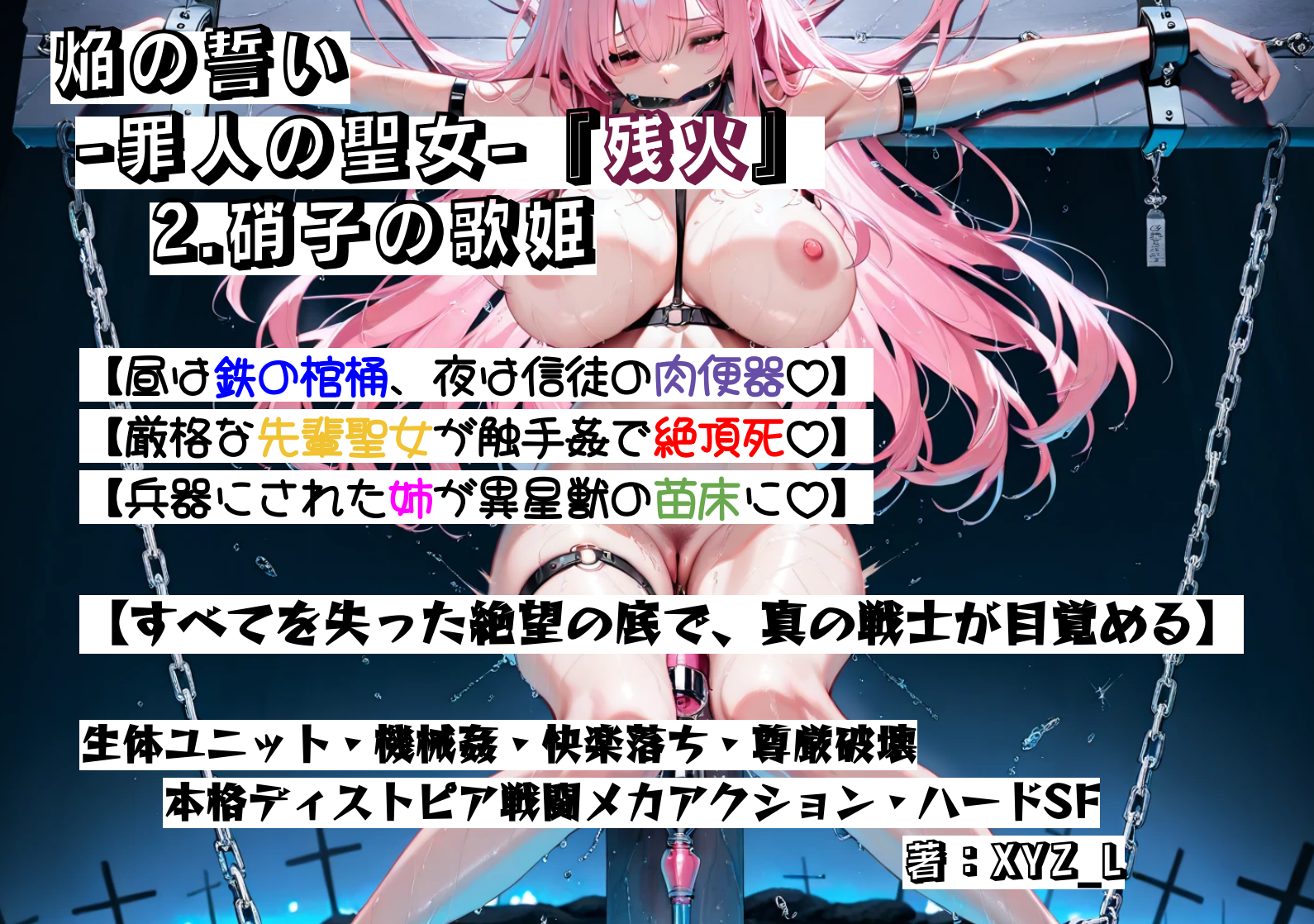




焰の誓い

-罪人の聖女- 『残火』

2. 硝子の歌姫

【昼は鉄の棺桶、夜は信徒の肉便器♡】

【厳格な先輩聖女が触手姦で絶頂死♡】

【兵器にされた姉が異星獣の苗床に♡】

【すべてを失った絶望の底で、真の戦士が目覚める】

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

焰の誓い

-罪人の聖女- 『残火』

2.硝子の歌姫



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

【前録:AURA-01運用記録】

聖暦2025年。

連合の大攻勢により、セラフィック・オーダーは勢力の二割を喪失する致命的な打撃を受けた。

その発端となったのは、一人の若き聖女——セリナ・ステリオンによる機密情報の漏洩である。

連合の収容所にて過酷な陵辱と調教を受け、味方を裏切ったセリナは、教団により奪還され「大罪人」の烙印を押された。

戦力不足の教団は彼女を廃棄せず、見せしめと実用を兼ねた生体部品『アウラ聖女』として再フォーマットした。

身に纏うのは、快楽と痛覚で肉体を支配する拘束衣『セラフィックハーネス』。

搭乗するのは黒鉄の異形機『セラフィム・アウラ』。

かつて空に憧れた少女は、最前線で命を削る囹となり、夜は欲望の器へと堕とされた。

絶対の死地においてのみ、彼女の贖罪は許される——。

第8章:凍てつく死線

1.凍てつく死線

聖暦2026年1月28日。

旧ユーラシア大陸東端、廃墟都市セクター09。

かつて巨大な工業地帯だったその場所は、今は捻じ曲がった鉄骨とコンクリートが乱立する墓場と化し、吹き荒れる猛吹雪がその無惨な傷跡を白く覆い隠していた。

この廃墟の地下には、連合軍（U.L.A.）の前線補給ターミナルが存在する。

カテドラル・ノースを突破した敵師団が、聖都攻略のために膨大な弾薬と燃料を備蓄している「心臓部」だ。

その心臓を確実に突き刺すために、四つの影が吹雪の中を疾走していた。

『——作戦領域（AO）到達。これより、フェーズ1へ移行する』

凍りついた通信回線に、ミリアの冷徹なコマンドが響く。

彼女が駆るのは、指揮官仕様にチューニングされた金色の流麗な機体『SO-A03セラフィム・グローリア』。

『了解。……相変わらず酷い天気ね。センサー感度、低下しています』

右翼を守るのは、聖女ベルタ。

純白の量産型セラフィムを駆る彼女は、課せられた任務に忠実であり、どこか冷めた声色で状況を報告する。

『あ、あの……ミリア様。先行するAX01（アウラ）のバイタルが不安定です。脈拍が急上昇、精神負荷も……これ以上は危険では？』

左翼を守る聖女クラリスは、対照的に震える声で通信を入れてきた。

彼女はまだ若く、異様な姿に変わり果てたかつての僚機（セリナ）を気遣う優しさを、その胸に残していた。

そのクラリスの視線の先、先頭を走るのは——異形だった。

かつて純白だった装甲は、黒い無骨な増加装甲によってツギハギに補修され、背中に展開された一対のスラスターも、片翼が黒鉄の板で塞がれてまるで折れた翼のように不揃いだ。

デュアルアイを隠す黒いバイザー状の追加装甲で顔面（フェイス）を覆われたその姿は、表情のない死刑執行人のような威圧感を周囲に放っている。

次期主力機試作型『SO-AX01セラフィム・アウラ』。

『無駄口を叩かないで、クラリス。……聞こえているわね、AURA-01。作戦通り、貴女が先陣（デコイ）を切りなさい』

ミリアの容赦のない声に、セリナは狭い操縦席の中で身を震わせた。

.....知っている。この感覚。

狭いコックピットに染み付いた、鉄錆と焦げたオゾンの匂い。

背中に当たるシートの、馴染み深い歪み。

コンソールの右隅には、薄汚れた「シールを剥がした糊の跡」が、
今も微かに残っている。

度重なる敗戦で深刻な物資不足に陥っている教団に、まだ使えるコンソールパネルをわざわざ新品に交換するような余裕などあるはずがない。

機能に支障がない限り、過去のパーツはそのまま流用されるのだ。

かつて、正規パイロットに昇格したばかりのセリナが、お守り代わりにこっそり貼った「幼い猫のステッカー」。

本来、神聖な機体を汚す冒流行為として、見つければ懲罰房行きの大罪だ。

だが、それを見つけたミリアは、呆れながらもその白い手で見逃してくれたのだ。



『馬鹿な子。……神様に見つかからないようにしなさいよ?』

そう言って苦笑した優しい姉弟子は、もうどこにもいない。

ステッカーは無惨に剥がされ、糊の跡だけが黒ずんで残っている。

それは、「許されていた子供時代」が完全に終わったことの証明だった。

「.....ニャー.....」

セリナは無意識にその黒ずみを指先でなぞり、幻聴のような鳴き声を口の中で小さく転がした。

今の通信スピーカーから聞こえるミリアの声にあるのは、汚らわしい罪人を見る冷徹な響きだけだ。

かつての栄光ある聖女の翼（A01）は、今や黒い拘束具に縛られた罪人の棺桶（AX01）となって、再び彼女を内側から閉じ込めていた。

「うう.....ごめんなさい、ミリアお姉さま.....。私、いい子にするから.....」

セリナは傷だらけのコンソールを、愛おしむように撫でた。

その感傷を冷酷に断ち切るように、ミリアが作戦の詳細を告げる。

『敵の対空防衛網は濃密よ。まともに飛び込めば蜂の巣ね。だから、貴女が地を這い、敵のセンサーを攪乱しなさい』

戦術データリンクの画面に、ミリアから転送された冷徹な囹のルートが赤々と明滅する。

『貴女が敵の目を引きつけている間に、私が高所から対空火器を狙撃（スナイプ）。防空網を無力化したのち、本命の「自爆用ドローン」3機を地下倉庫へ突入させる』

完璧で、血の通わない作戦だった。

要するに、セリナに「囹になって死ぬ気で暴れろ」と言っているのだ。

「.....了解.....しました.....」

セリナの返答は、湿った吐息混じりだった。

コックピット内は、地獄のような湿度と熱気に満ちていた。

前後から体内に限界まで注入された「機体冷却用聖水ジェル」が、妊婦のように不自然に張り詰めた下腹部を内側から強く圧迫し、彼女の正常な思考力を奪っている。

股間のプラグからは微弱な電流が断続的に流れ、セリナの肉体に、強制的な戦闘意欲（発情）を維持させていた。

『行くわよ。……散開（スプレッド）！』

ミリアの号令と共に、アウラのスラスターが爆発した。

ズドン！！

雪煙を激しく巻き上げ、セリナ機が廃ビルの谷間へと滑り込む。

その速度は通常のセラフィムの3倍近い。

人間が耐えられるGの限界を、薬物投与とジェルによる耐圧負荷軽減（インターナル・リキッド効果）で無理やり突破しているのだ。

「あ、あぁっ……！速い、怖い……！」

『敵影確認。……前方、ハウンドタイプ3機！』

データリンクを介したクラリスの警告と同時に、瓦礫の陰から連合軍の主力兵器『ハウンド』が姿を現した。

高さ8メートルを超える無骨な黒鉄の巨人。

装飾を完全に削ぎ落とした無機質な人型の頭部で、赤い単眼（モノアイ）が不気味に明滅し、迫り来るセリナを完全に捕捉する。

彼らは即座に反応し、両腕のレーザーキャノンをアウラに向けて斉射した。

ジュッ、ジュワワッ！

数条の光弾がアウラの肩口をかすめ、装甲表面の耐熱塗装を瞬時に焼き焦がす。

直撃ではない。

だが、フレイムを伝導した高熱がコックピット内の温度を急上昇させ、セリナの脳内に真っ赤な「DANGER」の文字と、鼓膜を刺すような警告音が直接叩き込まれた。

「ひっ、いやぁっ！熱い、怖いっ！」

恐怖でセリナが悲鳴を上げた瞬間、機体に搭載されたサイコシステムのミュートタイプ——『試作型サイコ・ミュー』が強制介入した。

アウラ・システムが、恐怖で硬直しかけた彼女の脊髄信号を完全に遮断（インターセプト）し、独自の戦闘プログラミングでハッキングする。

[TARGETLOCKED:EXECUTE]

セリナの意思とは無関係に、操縦桿を握る両手が神速で動いた。

機体は水上を滑るように、真横へ暴力的なサイドステップを踏んだ。

「ぐうっ……！？」

内臓がひしゃげそうな凄まじい横G。

だが、パンパンに満たされた胎内の聖水ジェルが水圧のクッションとなって臓器の偏りを強引に押し返し、張り詰めた下腹部がタップンと重く波打つ。

「怖い」と感じる前に、機体は殺到する次弾の射線を紙一重で回避し、そのまま慣性を殺さずに敵の懷へ飛び込んだ。

ズバァッ！

左腕から展開された「高出力プラズマブレード」が一閃。

制御リミッターを外され、赤黒く変色した雷光を纏う刃が、先頭のハウンドの胸部装甲を豆腐のように滑らかに溶断する。

切断面がドロリと溶け落ち、内部の動力部が誘爆した。

『あ.....あっ、んうっ.....!』

爆発の衝撃と、敵を完全に破壊したデータのフィードバック。

それが股間のプラグを通じて、強烈な「快感（報酬）」として脳と子宮に直接叩き込まれる。

セリナはビクンと背中を大きく反らせ、黒い拘束具の中に磔にされたままガクガクと小刻みに震えた。

「殺しちゃった.....また.....気持ちいいっ.....! ♡」

口の端から銀色のよだれが垂れ、虚ろな瞳が強烈な快楽に潤む。

それは戦闘の興奮などではない。

システムによって肉体に与えられた、逃れられない強制絶頂の余韻だった。

『AURA-01、足を止めるな! 次が来るわよ!』

通信回線から響くミリアの叱咤。

残る2機のハウンドが、緻密に連携して左右から迫る。

だが、今のセリナには「死角」という概念が存在しなかった。

全天周囲のセンサー情報とサイコ・ミューによる脳波リンクが、敵の持つ明確な殺意を360度すべて感知しているからだ。

右腕に懸架された巨大な多銃身砲（ガトリング）が駆動音を上げる。

フオオオン……パァン、パァン、パァン！！

限界まで強化された冷却ジャケットに覆われた6本の黒い砲身が高速回転し、独特の乾いた破裂音が戦場に響く。

それは従来の火薬式ではない。

プラズマ圧で弾丸を撃ち出すセラフィム共通主兵装を、罪人用に魔改造した30mm電熱化学ガトリング砲『SCS-GX30-Fパージファイア改』だ。

武器を捨てる自由すら奪われ、右腕に直接ボルト留めされたその黒い拷問兵器から、音速を超えたプラズマ炸薬弾が左側のハウンドへ吸い込まれるように着弾する。

甲高い炸裂音と共に、敵機は内側から派手に破裂した。

飛び散る装甲の破片と共に、焼け焦げた肉片と、鼻を突くタンパク質の焼ける臭いが戦場に撒き散らされる。

ハウンドの動力源——「生体ユニット」となった人間が破壊された証だった。

同時に、右側の敵に対しては、脚部のスラスターペダルを限界まで踏み込んで跳躍。

敵の頭上を鮮やかに飛び越しざまに、背面撃ちでコックピットブロックである頭部を正確に撃ち抜いた。

ドン、ドン！

わずか10秒で、一個小隊が全滅。

雪原は、鉄と肉の焦げる濃厚な臭気で満たされた。

『……化け物ね』

通信回線の向こう、高所の廃ビルから狙撃体勢に入っていたミリアの、吐息混じりの呟きが漏れ聞こえる。

その声に滲む底知れぬ軽蔑の響きが、「仲間を売ってまで、そんな醜い獣に成り果てたのか」とセリナの罪悪感を無慈悲に抉り出す。

かつての姉弟子が向ける、愛憎の入り混じった冷たい棘だった。

戦術データリンクの画面上、右翼を守るベルタの量産機を示す輝点が、わずかに後退したのをセリナのメインモニターが捉える。

セリナの機動は、洗練された騎士の動きではない。

痛みと快楽に狂った獣が、本能のままに暴れているような、おぞましい強さだった。

『こちらアルファ（ミリア）。デコイが敵を引きつけた。……対空火器、排除する』

アウラの暴れっぷりに敵の防衛部隊がパニックを起こし、注意が地上へ集中している。

その隙をミリアは見逃さなかった。

長距離ビームライフルのトリガーを引く。

ズウン！！

凄まじい轟音と共に、太い粒子の奔流が吹雪をねじ伏せて走った。

ただの光の矢ではない。

質量を持った高エネルギー粒子が凝縮された、破壊の鎚だった。

ビルの屋上に設置されていた対空ミサイル車両が、直撃を受けた瞬間に装甲ごとひしゃげ、爆散する。

次弾装填。

二射目。三射目。

雪を瞬時に蒸発させながら突き進む熱量が、脅威となる対空火器を次々と粉砕していく。

『……脅威排除（クリア）。フェーズ2へ移行』

セリナの広角モニターの隅で、対空脅威の消失を確認したミリアの機体が、用済みになった長距離ビームライフルを躊躇なくパージする映像が映し出された。

ドオン、と重い音を立てて高価な兵器が瓦礫の上に転がる。

これからは機動力が生死を分ける乱戦になる。

ミリアのグローリアは背部ラッチから、愛用の『パージファイア』を引き抜くと、両腕のプラズマブレード発振器の接続（リンク）を確認し、金色のスラスターを激しく噴かしてセリナの後を追った。

『作戦通りよ。……AURA-01、そのまま中央大通りへ突っ込みなさい。敵の増援をすべて引き受けるのよ』

「は、はい……おねえさま……んうっ……」

セリナは涙でぐしゃぐしゃになった顔のまま、絶頂の余韻に太腿を細かく震わせながら、再びスラスターペダルを強く踏み込んだ。

彼女の自由な意思はすでに摩耗し、ただミリアの命令と、システムが与える快樂だけが、彼女の肉体を動かす燃料となっていた。

2.地下からの呼び声(エコース)

作戦は順調に進んでいるように見えた。

舞台は、かつての繁栄を誇った摩天楼の底。

頭上を覆うように折れ曲がった高層ビル群の隙間を縫って、セラフィム隊は進軍していた。

セリナのアウラが囷となって敵を攪乱し、ミリアがガトリングによる弾幕でビルの屋上に設置された対空火器を沈黙させ、2機の僚機が残存するハウンドを掃討していく。

その三次元的な連携の様子が、セリナのメインモニターの片隅に表示された戦術データリンクの輝点として克明に刻まれていた。

だが、ビルの谷間を吹き抜ける猛吹雪と、廃墟の街路には異様な空気が澱んでいた。

破壊されたハウンドの残骸から流れる黒いオイルと、焼け焦げた肉の臭気。

そこに、密室となったコックピットの換気機能すら限界を迎えるほどの、もっと生臭く粘ついた「何か」の匂いが混ざり始めていた。

セリナの広角モニターの中で、先行するミリアの金色の機体が背部のウェポンラッチを鋭く解放するのが見えた。

ガコンッ、バシユウウ……！！

重々しい排気音と共に、ミリアの背中から3つの巨大な「黒い楔」が切り離される。

自爆用の大型ドローンだ。

数トンの鉄塊を吐き出したことで、金色の機体が重力から解き放たれ、フワリと浮き上がる挙動をデータリンクの推力高度インジケーターが示していた。

『フェーズ3へ移行。ドローンを地下換気口（シャフト）経由で燃料貯蔵庫へ誘導する。……AURA-01、射線を空けなさい』

ミリアの誘導に従い、ドローンたちは生き物のように翼を広げ、地下への入り口を目指して滑空を開始する。

「……了解（ラジャー）……！」

セリナは短く応え、操縦桿を引いて、崩れ落ちた歩道橋の残骸を機体の剛脚で強く蹴った。

股間のプラグから断続的に流れるパルス電流と、内臓を圧迫する乳白色のジェルがもたらす強制的な高揚感によって、彼女の胸を支配していた恐怖は一時的に麻痺していた。

このまま終わればいい。

そうすれば、これ以上のお仕置きをされずに済む。

だが、その時だった。

ズズズズ……！！

砲撃による震動とは明らかに違う。

もっと深く、アスファルトの下、地底の底から這い上がってくるような、湿った不気味な地鳴りが、廃ビル群を激しく震わせた。

同時に、セリナの脳内にキーンと鼓膜を突き刺すような不快な高周波ノイズが走る。

「くっ……！ 電子妨害（ジャミング）……？ 違う、もっと……気持ち悪い……」

セリナの直感が警鐘を鳴らす。

ただの電波障害ではない。何億もの蟲が脳内で一斉に蠢くような、肉体が根源から拒絶する悪寒。

[WARNING : BIOLOGICAL SIGNAL DETECTED]

[ANTI-SONG SYSTEM : AUTO-ACTIVATED]

全天周囲モニターに真っ赤な警告が走り、機体に搭載された『エコーズ攪乱装置（アンチ・ソング）』が自動起動する。

『.....磁気異常を探知。地底から.....この反応は、エコーズ！？』

通信回線から響くミリアの驚愕の声と同時に、地下鉄の通気口やマンホールから、「それ」は一斉に噴き出した。

紫黒色の粘着質な液体。

いや、液体ではない。それは自らの意思を持つかのように蠢き、鎌首をもたげる無数の「触手」だった。

『総員、警戒せよ！ 地下よりエコーズ出現！』

戦場は一瞬で混沌へと包まれた。

触手たちは、敵味方の区別なく無差別に襲いかかった。

セリナの死角、データリンクの画面上で、近くにいた連合軍の有人主力機『セクター』に触手が絡みつ়映像が同期される。

装甲を強酸の粘液で溶解させながら、肉厚な触手がコックピット内部へと侵入していく。

『うわあああ！ なんだこれは！？ 制御不能、脱出（イジェクト）できな……ぎゃあああ！！』

傍受した連合軍のオープンチャンネルから、パイロットの生々しい断末魔がスピーカーを通じて響き渡る。

さらに、無人機である『ハウンド』の残骸にも異変が起きた。

ズズッ……ガシヨン！

破壊され、雪原に転がっていたはずのハウンドが、ギチギチと不快な金属音を立てて再起動したのだ。

千切れた油圧パイプの断面に、紫黒色の触手が「人工筋肉」のように潜り込み、強制的に関節を駆動させている。

潰れたはずの頭部では、赤い単眼（モノアイ）が不規則に明滅し、エコーズからの不気味なエネルギー供給を受けて熱量を放ち始めた。

ただの再生ではない。

機械と生物が混ざり合った、冒涇的な『複合汚染体（アマルガム）』の誕生だった。

『レーダーに障害発生！ 乱反射（クラッタ）が酷くて識別できません！』

『ミリア様！ どれが敵ですか！？ レーダーが真っ赤です！』

僚機である聖女ベルタの悲鳴が混ざる。

林立するビルの残骸が電波を乱反射させ、そこへエコーズのジャミングが加わったことで、セリナの戦術レーダーも完全にホワイトアウトしていた。

セリナの視界も、無数の偽装マーカー（デコイ）で埋め尽くされ、警告音が鳴り止まない。

連合軍、オーダー、そしてアマルガム。

三つ巴の乱戦の中で、敵味方の境界が溶けていく。

「くうっ……！ 偽装データだらけ……！ でも、殺気（ロックオン）は……！」

セリナは歯を食い縛り、必死に情報の濁流に意識を集中させた。

泣き叫ぶだけではない。

彼女は、汚染された視界の中から「本物の敵意」を嗅ぎ分けようとする、ネオタイプ特有の鋭さを残していた。

その時。

セリナの死角——背後の巨大な崩落ビルの影から、強烈な敵性信号が膨れ上がった。

モニターのリアビューカメラには、アウラへ飛びかかろうとする
「紫黒の触手」の熱源がはっきりと映し出された。

[HOSTILE DETECTED : RIGHT-BACK]

[AUTO-COUNTER : ENGAGE]

思考する時間などない。

「そこッ！」

セリナが反応するより早く『試作型サイコ・ミュー』が生存のための最適解を弾き出し、彼女の腕を強制的に跳ね上げた。

神速の反応（リフレックス）。

右腕にボルト留めされた黒い拷問兵器『SCS-GX30-F』ごと、機体の右半身が人間の限界を超えた速度で暴力的に旋回し、その影を捉える。

パン！！

乾いた破裂音。

放たれたプラズマ炸薬弾は、寸分変わらず敵の熱源を撃ち抜いた。

だが、着弾の瞬間、その触手の影は陽炎のように揺らめいて消滅した。

高熱を帯びた粘液と、偽の生体パルスを合成して放った『生体偽装（バイオ・デコイ）』による幻影。

幻影が晴れたその場所——射線の延長線上にいたのは、ミリアの誘導で地下倉庫へ向かっていた味方の自爆ドローン編隊の先頭機だった。

ドオオオン！！

直撃を受けた1番機が爆散する。

『なっ……！？ AURA-01、貴女なにを撃っているのッ！？』

通信機越しに、ミリアの信じられないという絶叫が響く。

だが、セリナには弁解する暇さえ与えられなかった。

「あ.....嘘.....敵が、いたの！ 嘘じゃない.....！」

バチィッ！！



「——ッ、あひいいっ！？♡」

セリナが絶叫した、その刹那。

機体制御システム『パニッシャー・フィードバック』が容赦なく作動した。

見事な命中を検知したシステムによる、脳髄を溶かす甘美な脳内麻薬（エンドルフィン）の過剰分泌。

そして、システムが味方への攻撃と判定したことによる、致死量ギリギリの最大懲罰——神経を直接焼き切るとき高電圧の電流。

天国と地獄、相反する最大出力の信号が同時に、セリナの最も敏感な秘肉と脳へ暴力的に叩き込まれたのだ。

「あ、ぎっ……！？ い、たい……痛いのにいッ、んくうッ……♡」

激痛で意識が飛びそうなのに、強制的な快楽がそれを許さない。

痛みすらも極上のスパイスへと変換され、プラグが貫通した子宮がキュウキュウと無様に締め付けられる。

限界まで冷却ジェルで膨れ上がっていた下腹部が激しく痙攣し、プラグの隙間から行き場を失った白濁液をボタボタとシートへ撒き散らしながら、彼女の身体は操縦席で無防備に跳ねた。

「らめえ、おかしくなるう……！ こわれちゃうラッ！」

ガクガクと背中を反らせ、白目を剥きながら涎を垂らす。

その顔は、苦悶と絶頂が混ざり合った、冒瀉的なまでのアへ顔へと歪んでいた。

その数秒の強制絶頂による機能フリーズが、戦場では致命的だった。

セリナが機能不全に陥ったその隙を、敵は見逃さなかった。

爆風で隊列を乱した残りのドローンに対し、今度は地下から本物の敵が牙を剥いたのだ。

まず、後続の2番機が、エコーズが展開する濃密な電子妨害の嵐に捕まった。

セリナの網膜モニター上の輝点が、ノイズの渦に飲み込まれて乱れ飛ぶ。

制御を失ったかのようにふらつき、そのまま猛吹雪の闇へと吸い込まれていった。

[DRONE 2 : SIGNAL LOST]

信号消失。

どこへ消えたのか、墜落したのかすら分からない。

だが、まだ最後の希望——3番機が残っていた。

唯一生き残ったドローンが、必死に体勢を立て直し、地下への入り口へ向かおうとする。

『行けっ！ お願い、届いて……！』

ベルタが祈るように叫ぶ。

だが、その願いは無慈悲に踏みにじられた。

ズドォォン！！

セリナのフロントモニターの隅、地下マンホールから、巨大な紫黒の「顎」が飛び出した。

アマルガム化したハウンドの腕だ。

それはハエを叩き落とすような残酷な正確さで、最後のドローンを空中で鷲掴みにした。

グシャァッ！

金属がひしゃげる嫌な音。

ドローンは敵の掌の中で握り潰され、燃料タンクが引火。そのまま敵の腕ごと爆発し、虚しい火球となって消えた。

[DRONE 3 : DESTROYED]

[MISSION OBJECTIVE : FAILED]

全機喪失。

作戦の要であった遠隔攻撃手段は、セリナの誤射による硬直と敵の迎撃によって、完全に消滅した。

『AURA-01、システム硬直（フリーズ）！？くっ、早く再起動しなさい！』

ミリアの焦燥に満ちた怒声が飛ぶ。

ドローン全滅を確認した彼女の思考は、瞬時に最悪の選択肢へと切り替わっていた。

『作戦変更（プランB）へ移行する』

吹き荒れる雪煙の向こう、金色の指揮官機が戦術データを冷酷に更新し、新たな最適解を割り出す。

『遠隔打撃手段を失った以上、私たちが直接叩くしかないわね。
.....総員、突撃準備』

それは、事実上の特攻命令だった。

だが、その言葉が終わるよりも早く、右翼を守っていたベルタが動いた。

彼女のセンサーは、セリナが誤射した瞬間に生じた「敵側のノイズの揺らぎ」を見逃さなかったのだ。

セリナの戦術モニター上に、ベルタが補足した敵本体のマッピングデータが強制同期される。

瓦礫の奥、熱源遮断カバーを纏って潜む中型アマルガムの影。

あれがこのエリアの電子戦を支配している司令塔だ。

セリナを罠にかけるために高出力デコイを使った今、奴の遮蔽フィールドは一時的に薄くなっている。

機能不全の囹（セリナ）を守ってジリ貧になるより、元凶を絶つ。

『デコイ（セリナ）、沈黙！ 左翼の射線が空きました！ 私が敵本体を叩きます！』

ベルタは叫ぶと、硬直するアウラを追い抜いて前進し、瓦礫の陰へ砲口を向けた。

セリナのバイザー越しに、純白のセラフィムが雪煙を上げて突進していく姿が映る。

セリナを守るためではない。

作戦を完遂するための、軍人として最も合理的で、正しい判断。

だが、敵はそれすらも読んでいた。

わざと司令塔の位置を晒し、動きの止まった獲物（セリナ）を餌にして、焦って飛び出してくる本命（ベルタ）を食らう。

最初から二段構えの狩りだったのだ。

ベルタがトリガーに指をかけ、必殺の射程に足を踏み入れた、その瞬間。

彼女の機体の足元——老朽化したアスファルトの地面が、広範囲にわたって内側から隆起し、爆砕した。

ズドオオン！！

『え……？ 地下から……！？』

オープンチャンネルから響くベルタの驚愕。

死角からのゼロ距離奇襲。

ベルタが狙っていた奥の敵はただの釣り餌。

本命は、かつての地下鉄構内に潜み、獲物が頭上の薄いアスファルトを踏むのをじっと待っていた、アマルガム化したハウンドの巨体だった。

道路を突き破って飛び出した黒鉄の顎が、ベルタ機の股下から装甲の薄い腹部に喰らいつき、その動きを封じる。

ギャリィィッ！！

装甲が食い破られる甲高い金属音と共に、コックピットの底が下から無惨に貫通された。

セリナのモニターには、ベルタ機のバイタルデータが臨界点を突破して異常値を示すアラートが鳴り響く。

逃れようともがくベルタの足元から、アマルガムの紫黒の触手たちが操縦席へと殺到。

彼女の股間に接続されていたオルガ・デバイスごと、その無防備な秘肉を刃物のように鋭く突き上げる。

ジェルの保護すらない子宮の最奥まで、暴力的にねじ込まれた異物の衝撃。

彼女の胎内から行き場を失った大量の愛液が、引き裂かれた粘膜の鮮血と混ざり合い、ぐちゅりと卑猥な水音を立てて溢れ出した。

『あ、がっ……！？ ひ、ああんっ！？♡』

常に冷静沈着だったベルタの口から、軍人としての悲鳴ではなく、強制的な快楽に脳を焼かれた女の甘い嬌声がオープンチャンネルに響き渡る。

だが、怪物はその屈辱的な絶頂の余韻すら許さなかった。

コックピットの中でベルタが快楽に白目を剥き、シートの上でガクガクと太腿を痙攣させ、ビクンと背中を大きく反らせたその刹那。

アマルガム化したハウンドは、拘束した純白の機体の両脇へと、黒鉄の腕を強引にねじ込んだのだ。

ジュッ、ジュワァァッ！！

装甲に直接砲口を押し当てての、レーザーキャノン・ゼロ距離斉射。

セリナの目前で、純白の機体のコックピットブロックが、絶頂に震えるパイロットごと瞬時に溶解・蒸発した。

『あ——』

ベルタの嬌声がノイズに変わって途絶え、機体が激しい爆炎の中に消える。

『ベルタ！！』

ミリアの絶叫。

僚機ロスト。

完璧だったはずの陣形は、人類の天敵が持つ圧倒的な悪意と知能の前に、あまりにも呆気なく、そして残酷に食い破られた。

3.崩壊する戦線

戦場は、鉄と肉が混ざり合う屠殺場と化していた。

舞台は、かつて旧時代の金融街だったとおぼしき「摩天楼の溪谷」。

天を突くような高層ビル群の残骸が、両脇に墓標のようにそびえ立ち、セラフィムたちの行く手を挟み込んでいる。

横道はとうの昔に倒壊したビルや崩れ落ちた高架道路の瓦礫で完全に埋め尽くされており、地下ターミナルへと続くこの幅広の「中央大通り」だけが、彼女たちに残された唯一の進軍ルートだった。

だが今、その一本道は地獄の底となっていた。

僚機ベルタの駆る純白の機体が目の前で爆散してから、どれだけの時間が経っただろうか。

客観的な時間は、わずか数分しか進んでいないはずだ。

だが、ネオタイプとしての極限の知覚加速と、脳髄を焼く強制パルスの過負荷が、死と隣り合わせの一秒を永遠のように狂おしく引き伸ばしている。

ビルの谷間を狂ったように吹き抜ける猛烈な吹雪と、エコーズが放つ不快なジャミングノイズの不協和音の中で、セリナの時間感覚は完全に麻痺していた。

「はぁ……はぁ……！ 死んで……死んでよぉッ！」

ズダダダダッ！！

アウラの右腕にボルト留めされた拷問兵器、SCS-GX30-F『パージファイア改』が狂ったように唸りを上げる。

暗視モニターの向こう、白濁した雪煙の中から次々と飛び出してきた「ハウンド」の頭部を、音速を超えたプラズマ炸薬弾が肉薄の距離で粉碎していく。

だが、倒れた敵機からは紫黒色の粘液がどろりと溢れ出し、千切れた首の切断面を瞬時に埋めていく。

粘菌が新たな「神経」となり、触手が「筋肉」となって、破壊されたはずの鉄屑を強引に繋ぎ合わせるのだ。

ギチギチと不快な金属音を立てて再び起き上がるその歪な姿は、機械のゾンビそのものだった。

(気持ち悪い.....)

肉体が根源から警鐘を鳴らすような激しい悪寒が、セリナの胃の腑を直接鷲掴みにしてかき回す。

[WARNING : AMMUNITION BELOW 20%]

[WARNING : BARREL HEAT CRITICAL / COOL DOWN
RECOMMended]

網膜モニターへ冷徹にフラッシュする、アウラシステムの無機質な警告ログ。

それはセリナにとって、確実な死刑宣告のように響いた。

セリナは自分が完全に「詰んで」いることを、肌感覚としてリアルに感じていた。

右腕に強固に固定され、パーズして捨てることすら許されないガトリング砲。

限界突破した砲身から機体フレームを伝わって逆流してくる異常な排熱が、密室となったコックピットをオーブンのように熱していた。

耐G特性のために前後から体内へ限界まで注入された「聖水ジェル」は、機体の熱を際限なく吸い上げて煮え滾るように温度を上げ、パンパンに膨れ上がったセリナの下腹部を内側から無慈悲に茹で上げている。

敵は一向に減らない。

倒しても倒しても、地底から際限なく湧き出る触手がハウンドの残骸に寄生し、『複合汚染体（アマルガム）』としておぞましく蘇ってくる。

対してこちらは先ほどベルタを失い、残されたのはわずか3機のみ。

この遮断された戦場で、補給などあるはずもなかった。

『くっ……！ 貴様ら、しつこい！』

オープンチャンネルの通信回線から、ミリアの焦燥に満ちた声が響く。

セリナのフロントモニターの隅で、金色の指揮官機『グローリア』が、プラズマブレードの赤熱した光刃で殺到する触手の群れを必死に薙ぎ払っている映像が同期される。

常に規律正しく気高い彼女の動きには、明らかに余裕のない焦りが見えていた。

『クラリス！ 左翼が薄いわ！ 突破される！』

『弾切れです！ ミリア様、もうパージファイアが撃てません！』

最後の僚機、聖女クラリスの悲鳴のような通信。

データリンクが示す彼女の純白の機体は、すでに各部の装甲がボロボロに剥がれ落ち、敵の体液と煤で薄汚れていた。

空になって自重を増すだけとなった巨大なガトリング砲は既に戦場へ投棄されており、今のクラリスは腰に懸架していた予備の近接用・重散弾砲（ヘヴィ・ショットガン）を、震える手で構えていた。

有効射程の極端に短いその武器では、敵を自機の目の前まで引きつけねばならず、それは肉体が直撃を受ける死と隣り合わせの恐怖を意味していた。

「うう……ごめんなさい……私が、あの時……」

セリナの脳裏に、自分が誤射して爆散させてしまった「自爆用ドローン」の鮮明な映像が不吉にフラッシュバックする。

もしもあれが健在であれば、地下倉庫への分厚い入り口を強引にこじ開けられたかもしれない。

自分のせいで、すべての作戦が狂った。

自分のせいで、ベルタが死んだ。

底きれぬ罪悪感が、彼女の胸を容赦なく締め付ける。

バチィッ！！

「あぐっ！？」

思考が弱気へと傾いた瞬間、アウラ・システムが感知し、容赦のない罰を与えてきた。

股間のポートに挿入された極太のプラグから鋭い高電圧の電流が放たれ、子宮の最奥を直接鷲掴みにされるような激痛が走る。

[CODE : EXTERMINATE HOSTILE]

[CODE : DO NOT HESITATE]

[CODE : EXECUTE KILL]

システムがセリナの人間としてのPersonality（人格）を完全に無視して、冷徹な殺戮機械としての役割のみを強要してくる。

痛い。

怖い。

気持ちいい。

苦しい。

相反する極限の信号が熱を持った脳髓を暴力的にかき回し、セリナは涙と涎をだらだらと垂れ流しながら、強制駆動される手で操縦桿のトリガーを引き続けた。

「ごめんなさい……殺すから……許して……！」

その時だった。

ズズズズズ……！！

凄まじい地響きと共に、行く手を塞ぐように乱立していた瓦礫の山が、まるで生き物のように不気味に「脈動」を始めた。

グググッ……ギチチチチ……！！

金属が激しく擦れ合い、油圧シリンダーが限界の悲鳴を上げる不快な轟音。

そこに屹立したのは、圧倒的な「死」の質量そのものだった。

数え切れないほどのハウンドの残骸、破壊された戦車の鉄屑、そして先ほど撃墜されたばかりのベルタの機体の残骸までもが、無数の紫黒い触手と粘液によって無理やり接着され、道路幅いっぱいに広がる巨大な「鉄と肉の城壁」と化していたのだ。

左右は崩れることのない高層ビルの強固な残骸。

正面はこの蠢く肉の城壁。

それは、自らの意志で通路を塞ぐ、生きた巨大な栓だった。

城壁の表面から突き出した無数の火器砲塔や、半ば埋め込まれたハウンドの上半身がそれぞれ独立してギチギチと駆動し、一斉にこちらへとその砲口の照準を合わせる。

『ア、熱イ……』

『エラー、損害……』

通信スピーカーからは、アマルガムに取り込まれたオーダー機の壊れたシステム音声や、パイロットたちの断末魔のノイズが、オープンチャンネルを通じて呪いのように垂れ流されていた。

『な……っ！？ 道が……塞がれて……』

クラリスが絶句する。

それは物理的な「行き止まり」の具現化に他ならなかった。

『……退路は、断たれたわね』

通信回路からミリアの低い呟きが漏れる。

セリナの広域レーダーを見れば、背後からも退路を塞ぐように無数の敵影が肉薄していた。

メインカメラが捉える頭上を見上げれば、ビルの狭い裂け目から覗く灰色の空は、猛吹雪と対空砲火の光の網で完全に埋め尽くされている。

かつて「空の踊り子」と呼ばれたセラフィムの優美な翼も、この逃げ場のない閉鎖空間ではただの無駄な重りでしかなかった。

完全包囲。

ここで足を立ち止まらせれば、背後から撃ち抜かれるか、前方の迫り来る壁に物理的に押し潰されるか。

生き残る道は、ただ一つ。

あの死体と鉄屑でできた要塞を正面から「一点突破」し、その真奥にある地下倉庫を爆破して、その大混乱に乗じて脱出するしかない。

『総員、聞いて。……これより、一点突破（ポイント・ブレイク）を敢行する』

ミリアの声は、冷徹そのものだった。

彼女は戦術データリンクの数値を元に瞬時に残存戦力を計算し、最も合理的で、最も非情な布陣を指示する。

『私が先頭（ポイントマン）で道をこじ開ける。クラリスは弾切れよ、余計なことはせず私の側面に徹しなさい。……そして、AURA-01』

「は、はい……！」

『貴女はシステムが不安定すぎるわ。先頭に出れば、またデタラメな誤射をして私の邪魔をするでしょう。……大人しく、私の背中についてきなさい』

それはセリナを「守る」ための配置では決してない。

これ以上、作戦の邪魔をさせないための、至近距離での「監視」の配置だった。

信用されていない。

当然だ、とセリナは唇を強く噛み締めた。

『貴女の命はオーダーの所有物（リソース）よ。こんなところで無様に壊れることは許しません。……もっと相応しい死に場所まで、這ってでもついてきなさい』

「……了解（ラジャー）……」

まだ、楽には死なせてもらえない。

罪人は課せられたすべての罪を償うその瞬間まで、この地獄の底を歩き続けなければならないのだ。

『行くわよ！ セラフィック・オーダーの意地を見せなさい！』

ズドォォン！！

セリナのメインモニターの中で、ミリアの金色の機体からスラスターの噴射炎が最大出力で狂ったように噴射されるのが映し出された。

グローリアが激しい雪煙を巻き上げて、正面の巨大な肉の壁へと突進していく。

それに続いて、セリナとクラリスも操縦席の底のスラスターペダルを力任せに踏み込んだ。

これが、彼女たちに残された最後の賭け。

しかし、彼女たちはまだ知らなかった。

その一点突破の先に待っているのが、死よりも遥かに残酷な、尊厳を粉々に砕く地獄であることを。

4.黄金の翼、墮つ

猛吹雪の白濁した視界の中を、金色の流星が獰猛に走った。

ミリアの駆る『SO-A03 セラフィム・グローリア』の戦闘機動は、まさに戦場を支配する女神そのものだった。

背中の大推力スラスターから金色の高エネルギー粒子を激しく撒き散らし、手にしたプラズマブレードの一閃によって、立ち塞がる鉄と肉の城壁を容赦なく切り裂いていく。

『邪魔よ！ ときなさいッ！』

通信回線に響くミリアの気高い叫びと同時に、アマルガムの表面から突き出していた無数の砲塔群が、光刃が放つ超高熱によって一瞬で溶断された。

ミリアは単機で敵の防衛線を強引に食い破り、後続するセリナたちのための血路を前線に切り拓いていた。

だが、その金色の背中を死守する黒い影もまた、凄まじい冴えを見せていた。

セリナの駆る次期主力機試作型『SO-AX01 セラフィム・アウラ』だ。

「させない……お姉様には、指一本触れさせないッ！」

ズバァッ！！

ミリアの死角である背後から飛びかかろうとしたハウンドの群れを、アウラが神速の踏み込みで鮮やかに迎撃する。

次世代機としての圧倒的な推力と、セリナ本来のエース級の反射神経がサイコ・ミューを介して完全に融合し、その加速力は従来のセラフィムを完全に凌駕していた。

右腕にボルト留めされた固定ガトリング砲の強烈なバースト射撃で敵の姿勢を牽制し、左腕のプラズマブレードによる正確無比な突きが、ハウンドのコックピットブロックを一撃で正面から貫通する。

一切の無駄を削ぎ落とした、洗練された殺人剣。

彼女は決して、足手まといの罪人などではなかった。

教団に選ばれた、栄光ある聖女としての実力がそこにはあった。

だが——眼前の人類の天敵は、個の武勇だけでどうにかなる相手ではなかった。

ズズズズッ……！！

アウラが確実に頭部を粉碎したはずのハウンドが、装甲の裂け目から紫黒色の粘液をどろりと噴き出しながら、即座に関節を繋ぎ合わせて再生を始める。

さらにアスファルトの各所に開いた地下鉄の通気口からは、新たな触手の群れが数百、数千という圧倒的な物量で湧き出し、廃ビルの谷間を急速に埋め尽くしていった。

「はぁ、はぁ……っ！　なんで、死なないの……！？」

セリナの顔色が蒼白になる。

アウラの機体性能で個々の敵を圧倒することはできて、その絶対的な数と異常な再生速度が、完全に常識の限界を超えていた。

1機を完全に沈める間に、背後から新たな3機が立ち上がる。

激化する敵の包囲機動を回避するたびに、アウラが着地できる物理的な足場が戦場から消え去っていく。

『ちっ、湧きすぎよ……！ セリナ、側面（フランク）に回りなさい！ 一気に抜けるわよ！』

戦術データリンクの回線を通じて、ミリアの鋭い指示がセリナの脳内へ飛び込んでくる。

だが、彼女たちが選択した唯一の進路すらも、人類の天敵が持つ不気味な学習能力によって瞬時に塞がれようとしていた。

前方の肉の城壁から、杭のような形状をした対戦車触手（アンチ・タンク・パイル）が、凄まじい初速で無数に射出されたのだ。

それは濃密な弾幕となって荒れ狂い、回避しようとするアウラの進路を、まるで追い込み獵のようにただ一箇所へと強引に絞り込んでいく。

「くうっ！？」

セリナは反射的に脚部のスラスターペダルを限界まで踏み込み、高圧の噴射によって紙一重でパイルの直撃を回避した。

だが、システムによって強制的に着地を誘導されたその場所は、これまでの激しい砲撃の負荷によって、最も強度が脆くなっていたアスファルトの真上だった。

ガゴオオオッ！！

「あッ……！？」

不運、あるいはアマルガムの計算通りだった。

40トンを超えるアウラの着地衝撃に地盤が耐えきれず、地下空洞の天井の岩盤が大音響と共に崩落した。

足元をすくわれたアウラは大きく体勢を崩し、崩落する瓦礫の中で、一瞬だけ完全に無防備な背中を晒してしまった。

機体の姿勢制御シリンダーが復旧するまでの、致命的なラグ。

その瞬間を待っていたとばかりに、城壁の深奥からアマルガムの主砲級にあたる極太の触手が、動きを完全に止められた弱者——セリナへと向かって殺到した。

『——ッ！ ぼさっとするな、愚か者！』

セリナのフロントモニターに、金色の閃光が割り込んできた。

ミリアのグローリアだ。

自機への被弾回避を完全に放棄して背部スラスターを全開に噴射し、迫り来る触手の射線上に自ら躍り出ると同時に、セリナのアウラを強引に蹴り飛ばしてその場から突き放した。

ガォン！！

それは妹弟子を庇うというにはあまりにも暴力的であり、邪魔な荷物を戦場から強制的にどかすような、荒っぽい機体挙動だった。

だが、その非情な一撃こそが、セリナを確実な死の軌道から弾き出した。

ガァンッ！！

コックピットの底板を震わせる、重々しい衝撃音。

セリナの肉体を貫くはずだったアマルガムの太い触手の束が、身代わりとなったグローリアの左脚の駆動関節と、右腕の固定ラッチを根元から深く貫通し、その場に完全に縫い留めた。

『ぐっ……あぁッ！？』

オープンチャンネルからミリアの痛烈な悲鳴が響く。

動きを完全に封じられた金色の聖女に、周囲の地獄が一斉に群がった。

地下のシンクホールから噴き出した紫黒の濁流——無数の細い触手たちが、獲物を見つけた蟲のように彼女の機体へと殺到していく。

「ミリアお姉様……！？」

突き放された泥濘の中でアウラを強引に起き上がらせたセリナが、メインモニター越しに見たのは、神々しい輝きを放っていた金色の指揮官機が、瞬く間に汚泥のようなアマルガムの粘液に覆い尽くされ、その光を失っていく絶望的な光景だった。

ベチャッ、ベチャッ！

粘液の塊がグローリアのメインカメラを無残に塞ぎ、強酸を含んだ有機組織が関節の隙間に入り込んで強固に硬化していく。

グローリアは巨象が底なし沼に沈んでいくかのように、ズズウンと重い音を立てて冷たい地面に倒れ伏した。

『くっ……嘘でしょう……！？出力（パワー）が、落ちて……？』

セリナの網膜モニターの片隅で、グローリアの全ジェネレーターの機能停止を告げる戦術ログの数値が、無慈悲に急降下していく。

『動いて！ 動きなさいよ、グローリアッ！！』

ミリアの叫びも虚しく、コックピットのシステムは冷酷に駆動系の機能不全を告げていた。

アマルガムの触手たちは、装甲の隙間に潜む獲物の最も柔らかい場所を正確に感知していた。

機体の中で最も装甲の薄い部分——コックピットハッチの気密隙間だ。

ジュウウウウ.....！

不快な化学溶解音と共に、ハッチの境界線から白い腐食煙が立ち上る。

エコーズの放つ高濃度強酸の粘液が、グローリアの気密シーリングを瞬時に溶かしているのだ。

『ひっ、いやぁっ！ こないで！ 入ってこないで！』

通信回線越しに、常に冷静だったミリアの、取り乱した本能的な悲鳴が響き渡る。

同時に、異常な電子ノイズの嵐がセリナの全天周囲モニターを激しく埋め尽くした。

アマルガムの悪辣な意志が、ミリアの指揮官機が持つ広域データリンクだけでなく、サイコ・ミューの感応ネットワークをも完全にハイジャックし、彼女のcockpit内部の生映像と五感の生体パルスを、セリナの脳内へリアルタイムで強制的に逆流・展開させたのだ。

それは戦う者の心を内側から粉々にへし折るための、最も効率的で残酷な精神攻撃だった。

特大のモニターに映し出されたのは、外部ハッチが内側から暴力的にこじ開けられ、紫色のスライム状のぬめりを持つ触手が、ミリアの密室へと侵入していく地獄の光景だった。

同時に、サイコ・ミューの生体同期によって、狭いコックピットに満ちる肉の腐臭と生臭い磯の香りが混ざり合ったような異様で濃厚な空気が、セリナの無防備な嗅覚へと直接プロジェクションされ、逃れられない死の匂いが肺の深奥を暴力的に蹂躪していく。

『んぐっ……！ 臭い、やめて……！』

着用していたバイオポリマースーツの上から、冷たく粘つく触手たちがミリアの体を這い回る映像。

触手の鋭い先端から分泌される強酸が、彼女の気密服をじわじわと溶かし、引き裂き、ミリアの豊満な肢体をコックピット内に容赦なく露出させていった。

聖女としての気高い純白の肌が、紫色の粘液によって無残に汚されていく。

『あぁっ！ 止め……っ！』

白い乳房が完全に露出した。

粘着質の淫らな液が彼女の敏感な突起にこびりつき、強烈な化学刺激によって強制的にそこを勃起させる感覚が、セリナ自身の胸元へもおぞましい悪寒となって生々しく伝わってくる。

さらに別の細い触手がミリアの美しい金髪を掴んで強引に上を向けさせ、その無防備に開かれた口内へと滑り込むように侵入した。

『んぐっ！？ ごぼッ、オエ……！』

喉の奥深くまで触手が突っ込まれ、遺伝子汚染物質を含んだ粘液を直接噴射され、まともな呼吸を奪われる。

だが、ミリアが窒息しかけた直後、ずるりと口腔から容赦なく触手が引き抜かれた。

『げほっ、ごほおッ……！ はあっ、はあっ……！』

激しくむせ返り、酸素と混ざった汚濁粘液を吐き出すミリア。

だが、安堵を覚える時間など一秒も与えられなかった。

彼女が息を吹き返したまさにその瞬間、アマルガムの中で最も太く発達した別の触手が、彼女の股間のバイオポリマーを容赦なく食い破ったのだ。



『い、いやあああッ！！』

そこは、彼女の肉体と機体を繋ぐ制御用の「オルガ・デバイス」が挿入されていた絶対的な聖域だった。

触手は無慈悲な怪力でデバイスプラグを引き抜き、その激しい拍子に、ミリアが誰にも言わずにその秘部に着けていた「銀のクリトリス・ピアス」を強く引っ掛けた。

『あぎっ！？わたしの……秘密、が……ッ！』

規律の鬼であり、厳格な指揮官である彼女が、密かな信仰の証——あるいは背徳的な悦びとして隠し持っていた銀の環。

それが今、敵の触手によって白日の下に暴かれ、神経直結の激痛をもたらす最悪の急所として利用される。

グリィッ！！

ピアスが繊細な肉を千切りかけるほどの凄まじい勢いで引っ張られ、同時に、剥き出しになった秘部と、無防備な尻穴の二つの孔へ、太い触手が同時に深くねじ込まれた。

『——ッ！？あゝああああああッ！！？』

肉を引き裂く物理的な衝撃波が、サイコ・ミューの狂った感応同期によってセリナの股間のプラグへとダイレクトに逆流し、彼女の背中をシートの上で激しく跳ね上げさせる。

『こんな、穢らしい.....抜け、出てえッ！』

「やめてっ！ お姉様を離してえッ！」

セリナはアウラの操縦席で泣き叫びながら目を逸らそうとするが、アマルガムにハイジャックされた全天周囲モニターは、視界の100%を姉の陵辱映像で埋め尽くし、逃げることにすら選択させてくれない。

必死に抵抗しようともがくミリアの腰だったが、機械的に引き抜かれたプラグの激しい神経的な補正バグにより、肉体がビクビクと無様に震え、侵入を拒むどころかアマルガムの触手をさらに奥深くへと自動的に飲み込んでしまう。

触手は彼女のクリトリス・ピアスを根元から生々しく咥え込み、露出した神経接続端子への直接アクセスを開始した。

バチバチバチッ！！

コックピット内にスパークする、異常な電気信号。

それは戦闘データなどでは決してなかった。

エコーズが放つ、生物を苗床へと変えるための捕食と陵辱の生体パルスが、ピアスという純度の高い良導体を通じて、オルガ・システムごとミリアの脳髓へと直接逆流していく。

引き抜かれたプラグの喪失感と、強引に内臓を拡張される侵入の激痛。

そのすべての苦痛と、ミリアの脳内で発生した致死量のエクスタシーの波形が、サイコ・ミューを介してセリナの脳内へも強烈な不協和音となって直接叩き込まれる。

『ア、アガッ……！？ なに、これ…… 痛い、くるう……！』

高潔だった指揮官の脳髓が、アマルガムの放つ有害な生体パルスによって奥底から白く焼き切られていく感覚を、セリナは自身の網膜の裏側で克明に受信していた。

『いや、こんなの、感じない……！ 感じちゃ、いけないのに……ッ！』

ミリアの瞳が強制的な法悦に白黒と明滅し、縛られた身体が弓なりに激しく跳ねる。

前と後ろ、両方の孔を深部まで無意味に蹂躪され、まるで壊れた人形のように、その身体が激しくガクガクと痙攣を繰り返す。

聖女としての高潔な誇りも、指揮官としての理性も、圧倒的な快楽と汚濁の暴力の前に粉碎されていく。

『ひぎっ、ほおおッ♡ おか、しくなるう……！』

その時、体内に深く侵入している触手の根元が、ドクンッ、ドクンッ！ と不気味な脈動を始めた。

ミリアの内壁を直接焼き焦がすような、おぞましい灼熱の侵入。

『あ……？ なに、熱い……うそ、だめ……！』

内壁をドロドロに溶かすような灼熱の汚染エネルギーが触手の深奥で怪しく脈動し、一斉に充填されていく。

『中に出すのは、だめえッ！！』

ミリアが本能的な恐怖によって必死に首を振る。

だが、怪物は一切の慈悲を持たない。

ズブッ、ドピュルルルルッ！！

堰を切ったように、触手の先端から大量の「遺伝子汚染液」が彼女の胎内へと激しく噴射された。

生ぬるい精液などではない。

ミリアという個体の遺伝子構造を、アマルガムの苗床へと強制的に書き換えるための、灼熱の泥流だった。

『ご、ぼおッ……！？内側が、あついいいッ！！』

子宮と腸内、その両方に同時に逃れられない圧倒的な熱量が叩き込まれる。

「あああっ……嘘、お姉様の、おなか……っ！」

サイコ・ミューを通じてミリアの胎内に溢れる灼熱の泥流を神経共有した瞬間、セリナ自身の胎内を満たしている冷却ジェルの不気味な重みと過敏な神経が致命的な共鳴を起こし、セリナは激しい吐き気に襲われ、拘束衣の中でガタガタと震えた。

システムへの拒絶反応により、アウラのシートの結合プラグの隙間から、行き場を失った白濁したジェルが泡を吹いて溢れ出し、彼女の純白のパイロットスーツと太腿をドロドロに汚していく。

だが、ミリアのコックピット内で溢れる量など、氷山の一角に過ぎなかった。

それ以上の絶対的な汚染液の量が、強引に拡張された彼女の内臓へと際限なく注ぎ込まれていく。

『んひいッ！？おなか、膨れちゃう……！ぱんぱん、苦しいッ……！』

高潔だった聖女の平坦だった腹部が、異種族の種によって内側から押し広げられ、みるみるうちに臨月の妊婦のように無様に丸く膨れ上がっていく。

美しいくびれは完全に失われ、皮膚が極限まで引き伸ばされてミリアの肉体が悲鳴を上げる。

数秒にも及ぶ長い長い汚染液の注入が終わった時、そこにはもう、凜とした指揮官の面影など微塵も残されていなかった。

白目を剥いて舌を口の端からだらりと突き出し、全身を精臭のする粘液まみれにして、異様に膨らんだ腹を無防備に晒してピクピクと痙攣する、ただの肉の袋がそこに転がっているだけだった。

グローリアのコンソールモニターには、冷酷な警告ログが点滅していた。

[SYSTEM ERROR : PILOT CRITICAL]

「あんな、顔……お姉様の顔が、壊れてる……！」

セリナは操縦席で嗚咽を漏らし、強烈な神経共有の金縛りを振り払うように、震える手をレバーへと伸ばす。

だが、あまりにも凄惨な光景——誰よりも憧れ、慕っていた姉が、汚濁にまみれて怪物のメスへと完全に堕とされた姿に、本能的な恐怖で肉体がすくんでピクリとも動かすことができない。

モニターに映るミリアの表情が、苦痛と悦楽の狭間で歪むたび、セリナの胸に重い罪悪感が突き刺さる。

傷だらけの密室のスピーカーから漏れ聞こえる、姉の壊れていく掠れた声を聞くことしか、今の彼女には許されていなかった。

『あひっ、ひぐっ……セ、リナ……』

薄れゆく意識の限界の中で、ミリアがコックピットのカメラ越しに、呆然と立ち尽くすセリナのアウラを見つめ返してくるのが分かった。

無様に膨らんだ腹を抱え、全身をアマルガムの白濁液で汚された自分。

もう、助けなど来ない。

ミリアが抱いたその圧倒的な恐怖と絶望の波形が、痛いほどにセリナへと伝わってくる。

自分はここで、この汚らしい怪物に苗床にされて死ぬのだという、折れそうなほどの暗い諦観。

けれど——セリナの泣き叫ぶ声と乱れたバイタルデータが通信越しに届いた瞬間、ミリアから流れ込んでくる絶望の波形が、微かに、けれど確かな温かさを持って反転したのが分かった。

セリナのモニターに映るミリアの震える唇の動きが、音もなく「泣かないで、セリナ」と紡いだように、セリナの魂にはっきりと伝わってくる。

ミリアは、痙攣する頬の筋肉を必死に持ち上げた。

白目を剥きかけ、だらしなく舌が出たままの、精液まみれの屈辱的な顔のままで。

それでも彼女は、最期の瞬間に——優しく、セリナに向かって微笑もうとしたのだ。

それはかつて、正規パイロットになったばかりの幼いセリナの悪戯を、呆れながらも許してくれた時のような、姉としての深い慈愛の残滓だった。

『逃げ……なさい……セリナ……』

猛烈なノイズの嵐の隙間から、消え入りそうな、けれど確かな姉の最後の遺言がセリナの鼓膜を震わせた。

『生き……て……』

それは決して彼女を縛る冷酷な呪いなどではなく、暗黒の戦場に遺された、たった一つの清らかな祈りだった。

『罪を……償っ……て……』

その最期の言葉を遺し、アマルガムの触手に操られたハウンドの両腕——レーザーキャノンが、完全に動けなくなったグローリアのコックピットに向けて、ゼロ距離でその砲口の照準を合わせた。

高熱のエネルギーチャージ音が戦場に響き渡る。

セリナのモニターの中で、姉の最期の微笑みが、眩い破壊の光の中に包まれていった。

「——ッ！！ お姉、さまああああああッ！！」

装甲が瞬時に溶解し、グローリアの全容が激しい爆炎の中に消滅した。

5.鉄の咆哮

ドオオオオオン……！！

ビルの谷底に咲いた黄金の爆炎が、猛吹雪を一瞬で蒸発させる。

聖堂都市の守護者であり、セリナにとって唯一の理解者だった「姉」は、肉片一つ残さず消滅した。

粘液に汚され、隠していた秘密ごと尊厳を砕かれ、最後はただの肉の塊として。

「あ……あ……」

セリナの口から、空気の抜けるような音が漏れた。

理解できなかった。

なぜ、完璧だったお姉様が死んで、汚れたゴミ（わたし）が生きているのか。

なぜ、神様はこんなにも残酷なのか。

「いやあああああッ！！」

絶叫。

その感情の爆発を、アウラ・システムは見逃さなかった。

パイロットの精神崩壊（メンタル・ブレイクダウン）を確認。

「戦意喪失」による機能停止を防ぐため、システムは即座に「生存防衛モード（サバイバル・モード）」へと移行した。

[CRITICALERROR:PILOTSANITYLOST]

[SAFETYLIMITER:ALLPURGED]

[OVERRIDECODE:"IRONMAIDEN"]

バチバチバチッ！！

コックピット内を赤黒いスパークが走る。

座席下のコネクタから、致死量寸前の「戦闘用興奮剤（コンバット・ドラッグ）」と、恐怖を麻痺させるための高濃度の「聖水ジェル（催淫鎮静剤）」が、セリナの子宮と血管へ暴力的な水圧でポンプ圧送された。

「ぎっ、あああッ……！？熱ッ、なか、熱いいッ……！」

悲しを感じる脳の部位が、薬物と電気信号で強制的に焼き切られる。

同時に、限界まで膨れ上がっていた下腹部にさらにジェルが注ぎ込まれ、ドロリとした痺れるような快感が全身を這い上がってくる。

システムが、恐怖で竦むセリナの精神を「快楽」で上書きし、無理やり前へ進ませようとしているのだ。

代わりに注入されたのは、純粹にして凶暴な「殺意」。

脅威を排除しなければ自分が死ぬ。

だから殺せ。

壊せ。

気持ちよくなれ。

システムがセリナの「生存本能」と「性衝動」をハッキングし、暴走させたのだ。

ブオオオオオン！！

アウラのオルガ・エンジンが、臨界点を超えて唸りを上げた。

胸部の排熱ダクトから真紅の炎が噴き出し、周囲の雪を溶かしながら機体が振動する。

「あはっ……コロス……コロスう……♡」

セリナの瞳孔が限界まで散大し、人間的な理性の色が塗りつぶされる。

口元からはダラダラと涎が垂れ、涙と混じり合う。

股間のプラグが激しく脈動するたび、彼女の太腿はビクビクと痙攣し、コクピットシートを愛液で汚していく。

もはや彼女は人間ではない。

システムに欲望を制御された、ただの「生体部品」だった。

彼女は操縦桿をへし折らんばかりに握りしめると、ミリアを飲み込んだ「肉の城壁」へ向けて、真正面からスラスターを噴かした。

戦闘機動などとは呼べもしない。

死ぬことを恐れない、手負いの野獣の突進だった。

『——グオオオオオッ！！』

機体の外部スピーカーから、金属が軋むような咆哮が響く。

アウラは、右腕のガトリング砲を敵へ向けた。

ズダダッ、カキンッ！

乾いた金属音が虚しく響く。

残っていたわずかな弾丸は、突進の初速で即座に吐き出され、回転機構が空転する。

弾切れ（エンプティ）。

だが、セリナは止まらない。

トリガーを離すどころか、弾切れの警告（アラート）を無視して加速し、回転を続ける空の砲身（バレル）を、立ち塞がるハウンドの顔面に「槍」のように突き出した。

ガシヤアアアン！！

金属と強化ガラスが砕け散る音。

重量40トンの質量と突進の運動エネルギーが、高熱を持った砲身を敵の頭部へ深々と突き刺す。

アウラはそのままハウンドを押し倒し、巨体で馬乗りになって押さえ込んだ。

「死ねえッ！お姉様を返せえッ！あひいッ！」

叫び声には、悲痛な怒りと、薬物による昂ぶりが混じった嬌声が混ざる。

外すことすら許されない、右腕にボルト留めされた鉄の重荷（ガトリング）。

セリナはその銃身を引き抜くと、今度はそれを「巨大な鈍器」として振り上げ、敵の顔面へ狂ったように叩きつけ始めた。

同時に、左腕の「プラズマブレード」が起動する。

ブウウン！！

出力制御装置（リミッター）を解除された刃は、もはや剣というより、制御不能の「雷の鞭」と化して暴れ狂っていた。

ズドォッ！ズドォッ！ギャリリリッ！

右腕のガトリングで装甲を殴り碎き、左のブレードで中身を焼き切る。

洗練された剣技ではない。

あるのは、ただの破壊衝動。

装甲が溶け、中のパイロット（生体部品）が蒸発しても、彼女は攻撃を止めない。

何度も、何度も、何度も。

敵がただの鉄屑の塊になっても、彼女は泣き叫びながら操縦桿を叩き続けた。

『警告。右腕部固定兵装、著しい破損。関節部損耗率40%』

機体からの悲鳴（アラート）も、今の彼女には届かない。

馬乗り状態で殴り続けるアウラの右腕は、自らの衝撃で黒い銃身がひしゃげ、内部フレームが剥き出しになっていた。

それでも、セリナは止まらない。

「もっと……もっと壊さないと……！」

紫黒の触手（エコーズ）が、アウラの脚に絡みつく。

だが、今のセリナに恐怖はない。

彼女は脚部の姿勢制御バーニアを、至近距離で点火（ファイア）した。

ジュワァァッ！

肉が焦げる臭いと、システムが脳に送る「激痛」のフィードバック。

だが、それすらも彼女にとっては「燃料」だった。

痛みがある限り、まだ戦える。

まだ壊せる。

周囲には、すでに5機のハウンドと無数の触手の残骸が転がっていた。

単機での暴走による、異常な戦果。

だが、その代償として、アウラもまたボロボロだった。

弾薬は尽き、タンク内の『プラズマ触媒（リアクション・マス）』も底をつきかけている。

溢れる電力（パワー）を推力に変えるための血肉が、もう物理的に残っていないのだ。

装甲は剥がれ落ち、黒い内部フレームが剥き出しになっている。

まるで、皮を剥がれた死体のように。

「はぁ……はぁ……まだ、いる……」

目の前には、ミリアを食らった憎き「肉の城壁（アマルガム）」がそびえ立っている。

そこから新たに湧き出した触手が、アウラを狙って蠢いていた。

普通なら撤退する局面だ。

だが、壊れたセリナの思考は、1つの結論しか導き出せなかった。

『アノ壁ノ中ニ、ミリアお姉様ガイル』

『引キズリ出セバ、助カル』

論理の破綻した妄想。

しかし、システムはそれを肯定した。

なぜなら、この機体は「パイロットを生還させる」ことよりも、
「敵を殺す」ことに特化した棺桶だからだ。

「行くよ……アウラ……」

セリナは血の滲むほど強くレバーを握りしめ、最後のスラスター出力を絞り出す。

目指すは敵の大軍。

もはや帰還を考慮しない、機体そのものを砲弾とした「捨て身の特攻」。

「あ、ははははははッ！！」

アウラが肉の壁に激突する。

プラズマブレードすら失った左手と、ひしゃげた右腕のガトリングで、セリナはアマルガムの装甲を引き剥がしにかかった。

ベキッ、ベキベキベキッ！！

油圧シリンダーが破断する限界の音。

アウラの剛腕が、アマルガムの胸部装甲を強引にこじ開ける。

分厚い装甲板がメキメキと悲鳴を上げ、内部の赤いコアと、地下へと続く空洞（シャフト）が露わになった。

その瞬間。

ピピッ。

[SIGNALRECOVERED:TARGETLOCK]

死んだはずの信号が、猛吹雪の闇から蘇った。

電子妨害の海に消え、行方不明になっていた「2番機」だ。

奇跡か、あるいは無機質なAIの執念か。

電子の嵐の中で息を潜め、主（ミリア）を失いながらも、最後に残された攻撃目標への誘導電波（パス）を拾い続けていたとしか思えない。

そして今、狂戦士と化したセリナが、その「扉」をこじ開けたのだ。

キィィィン！！

アウラの頭上をかすめ、黒い楔が一直線に飛び込んでいく。

セリナが引き裂いた装甲の隙間、露出したシャフトの深淵へ。

「あ……？」

セリナが呆然と見送る中、ドローンはアマルガムの体内を食い破り、地下深くに眠る燃料貯蔵庫へと突き刺さった。

ズ……ズズズズズ……！！

地底の底から、不気味な重低音が響いた。

直後。

セリナの眼前にそびえ立っていた巨大な「肉の城壁（アマルガム）」が、内側から膨れ上がり——破裂した。

ドオオオオオオオン！！

世界が揺れた。

地下プラントに備蓄されていたロケット燃料用の「酸化剤を含む高純度推進剤」が、ドローンの起爆によって一斉に誘爆（イグニッション）したのだ。

そのエネルギーは行き場を求め、最も脆い地表へ向かって噴き上げた。

ゴオオオオオオッ！！

アスファルトが砕け、マンホールがコルク栓のように空へ吹き飛ぶ。

亀裂から溢れ出したのは、すべてを焼き尽くす「眩い金色の火柱」だった。

高純度のエネルギー液が燃焼したその色は、通常の赤黒い爆炎とは異なる、神々しいまでの黄金色。

涙で歪んだセリナの瞳には、それが亡き姉の機体が放つ、最期にして最大の輝きのように映った。

[MISSIONOBJECTIVE:DESTROYED]

[WARNING:GROUND COLLAPSE]

任務完了。

だが、代償は即座に支払われた。

地下空洞の爆発により、セリナたちが立っている「大通り」の地盤そのものが、液状化するように崩れ始めたのだ。

ガガガッ……ズボォッ！！

逃げ場のないビルの谷間が、巨大な陥没穴（シンクホール）へと変わっていく。

瓦礫も、アマルガムの死骸も、すべてが燃え盛る地下の煉獄へと飲み込まれていく。

「あ……お姉様……？綺麗……」

だが、狂乱の果てに虚脱したセリナは、動かなかった。

足元が崩れ、機体が傾いても、彼女はただ、嘔き上がる美しい火柱に魅入られていた。

このまま落ちれば、お姉様と一緒にになれる。

そんな破滅的な安らぎが、彼女の思考を支配していた。

ズウン……！

アウラの足元の岩盤が完全に砕け、黒い機体が灼熱の奈落へ向かって、ゆっくりと滑り落ちていく。

6.黄金の落日(決死圏離脱)

『ダメっ！戻りなさい、AURA-01！！』

落下する寸前、横合いから飛び出してきた純白の機体——生き残っていた最後の僚機、聖女クラリス機が、アウラに体当たり（タックル）を敢行した。

ガキィン！！

「あぐっ！？」

強烈な衝撃でアウラが吹き飛ばされ、安全圏の雪原へと転がる。

その直後、セリナがいた場所は轟音と共に崩落し、灼熱の奈落へと消滅した。

だが、セリナは止まらない。

這い上がるように機体を起こし、再び穴の方へ向かおうとする。

クラリス機はスラスターを逆噴射して滑り込み、その進路を死守するように立ちふさがった。

その白い機体もまた、決して無傷ではなかった。

左腕の装甲は吹き飛び、全身が煤とオイルで汚れ、バーニアからは不調を訴える黒煙が上がっている。

彼女もまた、暴走するセリナを追って、地獄のような戦場を切り抜けてきたのだ。

「はなして！邪魔しないでよおッ！あいつらを殺すの！私も死ぬの！」

セリナは操縦桿をガチャガチャと乱暴に揺らし、黒い装甲を軋ませて拘束された獣のように暴れる。

「お姉様がいない世界なんて、いらないッ！！」

『いけません！ミリア様が.....あの方が何のために盾になったと
思っているのですか！』

クラリスの悲痛な、しかし凜とした叱咤が通信回線を震わせる。

『あの方は最期に仰いました。「生きろ」と！』

涙声でありながらも決して折れない後輩の意志が、セリナの鼓膜を打つ。

『ここで貴女が死んでしまったら、ミリア様の死が無駄になってしまふ……！それだけは、絶対にダメです！』

「あ……う……」

その言葉が、狂乱していたセリナの意識に冷水を浴びせる。

レーダーを見れば、増援のハウンドとエコーズが、完全に包囲網を完成させようとしていた。

ピピッ。

[WARNING:FRAMEINTEGRITY<15%]

[CRITICAL:METALFATIGUELIMIT]

機体損壊率（ダメージ・レベル）、85%突破。

内部フレーム、金属疲労限界（メタル・ファティーグ）。

リミッターを解除した先ほどの暴走により、アウラの骨格はすでに限界を迎えていた。

これ以上の戦闘機動（マニューバ）は不可能だ。

今突っ込めば、敵に届く前に機体が自壊し、空中分解する。

それは戦死ですらない。

ただの無駄死にだ。

クラリス機が、アウラを庇うように敵の方を向いた。

ジュッ、ジュッ！

敵のレーザーがクラリス機の装甲を焼き、白い塗装を剥ぎ取っている。

量産型である彼女の機体には、隊長機のように特別に強化された複合装甲など施されていない。

まともな弾薬も尽きかけている。

今の彼女は、ただその脆弱な機体（ボディ）を物理的な盾にして、晒すことしかできないのだ。

クラリスもまた、震えていた。

大切な先輩聖女たち（ミリアとベルタ）を目の前で失い、恐怖で押し潰されそうになっているはずだ。

それでも彼女は聖女としての気高さを失わず、セリナを守る位置に立った。

『私が殿（しんがり）を務めます！貴女はその推力で、敵包囲網（ミート・ウォール）の「裂け目」を突破して！』

「クラリス……」

『行きましょう、セリナさん！生きて、一緒に帰るのです！』

純白の機体が、残弾の少ない牽制射撃で群がる触手を必死に引き剥がす。

『それが残された私たちの……貴女の、唯一の贖罪です！』

その叫びに、アウラ・システムが反応した。

深層心理に刻まれた「指揮官命令（コマンド）」が、セリナの暴走する破壊衝動を強制的に上書きする。

[PRIORITYOVERRIDE:COMMANDERORDER(MILLIA)]

[OBJECTIVEUPDATE:SURVIVE(生存せよ)]

セリナの意思とは無関係に、機体は「殲滅」から「離脱」へと行動指針を書き換える。

「死んで楽になること」さえ許さない、呪いのような生還命令。

背中のスラスターが、軋みを上げるフレームを無視して強引に青白い光を噴き出した。

バギィィッ！！

装甲が悲鳴を上げ、破片を撒き散らしながら、アウラは加速する。

目の前にそびえる「肉の城壁」——その中で、先ほどの誘爆と混乱によって生じた、唯一の「綻び」へ向けて。

ガキン！ゴシヤァッ！

立ち塞がるハウンドを、すれ違いざまに右腕のひしゃげた拷問兵器（ガトリング）で叩き割り、強引に粉碎する。

敵を破壊することではなく、突き抜けることだけに特化した、神速の離脱機動。

その後ろをクラリス機が必死に食らいつき、追撃してくる触手を牽制射撃で引き剥がす。

「うう……ごめんなさい……ごめんなさい……！」

セリナは泣き叫びながら、スラスターペダルを踏み続けた。

背後の爆炎の中に、ミリアの亡骸を飲み込んだ「肉の城壁」が遠ざかっていく。

また一つ、一番大切な命を雪原に置き去りにして。

後輩に背中を守られながら、私という汚らわしい罪人ばかりが生き延びていく。

◇

数十分後。

作戦領域を離脱した2機は、猛吹雪の止んだビルの谷間に身を潜めていた。

追手は振り切った。

だが、その代償はあまりに大きかった。

4機で出撃し、帰還できたのは2機のみ。

指揮官戦死。

作戦目標は半壊。

事実上の敗北だ。

雲の切れ間から、夕日が差し込んでいる。

廃墟の街並みを黄金色に染めるその光は、ミリアの機体の輝きに似ていて、残酷なほど美しかった。

アウラのコックピットの中で、セリナは虚脱状態にあった。

システムの異常な熱が去り、汗と混じり合って肌に張り付いた乳白色の冷却ジェルが、急速に冷え切っていく。

内臓まで侵入した異物の不快さと冷たさに、ガタガタと震えが止まらない。

生き残ってしまった。

死に場所を失ってしまった。

『……大丈夫ですか、セリナさん』

通信機から聞こえるクラリスの声は、泣くのを堪えて震えていたが、それでも優しかった。

それは罪人を責める響きではなく、同じ地獄を生き延びた戦友を労る、聖女本来の慈愛に満ちていた。

『辛いでしょうけれど……帰りましょう。私たちが生きて帰り、あの方々の『想い』を届けること。それがミリア様たちの生きた証になりますから』

「.....はい.....」

セリナは小さな声で応えるのが精一杯だった。

クラリスの清らかさが、今は何よりも痛かった。

彼女は悲しみをこらえ、「正しい聖女」として、死者の想いを背負って前に進もうとしている。

それに比べて自分はどうか。

汚れた機体の中で、卑猥なジェルにまみれ、ただ死んで楽になることばかり考えていた。

(私は.....なんて汚いんだろう.....)

硝子の棺桶（コックピット）に映る自分の顔は、涙と鼻水、そしてミリアを失った絶望で、酷く歪んでいた。

ミリアに守られ、クラリスに導かれ、それでも自分は、この恥ずかしい身体を引きずって生きていかなければならない。

黄金の夕日に背を向け、傷だらけの黒い天使は、とぼとぼと帰路につく。

鈍器として敵に叩きつけ、ひしゃげた右腕の黒い拷問兵器（ガトリング）が、捨てることすら許されずにだらしなく雪原を引きずられ、痛々しい轍（わだち）を残していく。

キン、キン……。

極寒の外気に晒され、急激に冷却された装甲板が、まるで誰かの嗚咽のようなきしみ声を上げた。

それは、終わりのない地獄への帰還だった。

作品名: 焰の誓い-罪人の聖女-『残火』2.硝子の歌姫

発行日: 2026年7月12日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
